

コミュニケーション能力育成の視点による 中学校英語教科書 task 分類

森 岡 浩 希

序論

この研究の発端は、筆者自身の教育実習での体験にある。中学生のころから英語教員を志望し、念願叶っての教育実習であった。幸運にも筆者の実習校では英語で英語の授業を行うという方針を採っていた。これまでの英語教育のあり方に疑問を抱き、真の英語を学ぶにはどうしたらいいのかという問いかけを自分自身に投げかけて得たひとつの手がかりが、英語は英語で学ぶという方法論であった。教育実習では是非とも英語で授業をしてみたいと密かに願っていたところ、偶然にも実習校から英語での授業を勧めてもらったのだ。

日本の中学校、高校で6年間英語を勉強しても英語を話せるようにならないという声をよく聞く。筆者自身もそうだった。その中で英語教師を志望したのは、日本の英語教育をコミュニケーションなものにシフトしていきたいという思いからだ。英語はあくまで言語であり、コミュニケーションのためのツールである。私たち日本人が日本語でコミュニケーションをとるように、英語圏では人々のコミュニケーション・ツールとして英語がある。そ

こから、本当の意味での英語の習得はコミュニケーション活動を行うことでなされるのではないかと考えた。英語の構造面だけを重視した学習形態では「英語は人と人がコミュニケーションをとるための道具である」という一面が薄れてしまい、数学や歴史などの「学問」であるかのように感じてしまう。そのことについて教育実習で非常に熱心に指導をしてくださった二見先生に的確なアドバイスをいただいた。二見先生は「英語は実技教科に近い」とおっしゃっていました。これがきっかけとなり筆者の中で英語という教科のあるべき姿が見え始めた。例えば、音楽の授業でいくら楽譜を読むための知識を学んでも実際に奏でてみなければどのような音が聞こえるのかわからない。しかし、楽譜が読めなくては演奏することも歌うこともできない。英語にもこれと同じことが言えるのではないだろうか。たとえ何万、何十万の単語を覚え、何千通りの構文を覚えても、それらの知識をコミュニケーションとして使わなければ相手に自分の気持ちや考えを伝える力は育たないのだ。

中学生の時期とは、多くの生徒たちにとって初めて英語を学習し始めるスタートラインである。これから英語の知識やコミュニケーションのための技術を獲得し始める時期である。その時期に英語を学問として勉強するのではなく、コミュニケーションの手段として学んでいくという方向に目を向けさせることが重要であると考ええる。そのため教育実習中に筆者は二見先生の指導のもと、授業中に行うtaskを考案することが多かった。taskとはその授業で獲得した知識と、生徒が内在している知識をコミュニケーションを通して使用するための活動である。taskを考案する作業の中で、まず感じたのは教科書にはtask活動と呼べる活動はあまりにも少なく、授業でtask活動を行っていくためには教師が自分で考えなくてはならないということだった。それはつまり、教科書ではコミュニケーション活動が行われにくいということでもあった。そして、実際にオリジナルのtask活動を考えるにあたって、生徒の興味関心を引くものであるか、その活動には意味の交渉 (negotiation of meaning) があるかなど、考慮すべき点が多く存在することに気付いた。同時にtask活動がいかに生徒の発話を促して、英語の授業を活発にするかという面も垣間見ることができた。

この経験を通じて、筆者は英語の授業にtask活動の必要性を強く感じるようになった。そして現在日本の中学校で使われている教科書はtask活動を取り入れたコミュニケーション活動をどれだけ重要視しているのかについて疑問を持った。また、さまざまな形式のtask活動がある中で、それらをバランス良く

取り入れていくことが英語教育の改善につながっていくのではないだろうかと考えた。

本論文の目的は以下の3点である。

- 1) 先行研究を元に、taskを分類する設定をする。
- 2) カテゴリーに沿って現行の検定教科書のtaskを分類し、コミュニケーション能力育成の視点から分類状況を検討する。
- 3) taskの分類から明らかにされた問題点を是正するためのtask改善案を提示する。

この目的を達成するために、現在日本の中学校で使用されている主な検定教科書（*Sunshine, New Horizon, New Crown* の3学年計9冊）からtask活動を抽出し、それらを4つのカテゴリーに分類する方法をとる。

1 章 Task Based Language Teaching

多くの中学校の英語の授業では、特定の文法事項を反復して練習することで定着させる活動が中心を占める。コミュニケーション能力の育成に語彙や文法事項の学習は不可欠であるが、現状ではそれだけにとどまってしまっている。コミュニケーション能力の育成に必要なのは学習者が手に入れた知識や技能を、目的を持って「使用する」ことである。従来の教育法では語彙や文法項目などが学習の単位であったのに対し、Task Based Language Teachingでは「task」と呼ばれる活動を学習の単位としている。Task Based Language Teachingにおけるtaskでは、たとえ不完全な言語形式の英語であったとしても、学習者が英語を使って他の学習者とコミュニケーションをとることを最重要視する活動である。ただし、これは文法事項の学習や語彙の習得を行わずに「通じさえすれば」式の英語を教えるのではない。学習者が新しい語彙や文法事項を獲得する際に、内在している知識や技能とこれから獲得しようとする知識や技能を「使用する」ことでより効果的に習得せしめるのが「task」と呼ばれる活動である。そしてこの「task」の効果を最大限に生かそうとするのがTask Based Language Teachingの基本理念である。

1. 1 taskの定義

まず、Task Based Language Teachingの要になる task について考察する。今日ではtaskはさまざまな定義付けをされている。それをTask Based

Language Teachingの立場から考察し、学校での英語教育の実状を鑑みたうえで本論文での定義付けを行う。

Long (1985) は次のようにtaskを定義している。

A piece of work undertaken for oneself or for others, freely or for some reward. Thus, examples of tasks include painting a fence, dressing a child, filling out a form, buying a pair of shoes, making an airline reservation, borrowing a library book, taking a driving test, typing a letter, weighing a patient, sorting letters, taking a hotel reservation, writing a check, finding a street destination, and helping someone across a road. In other words, by “task” is meant the hundred and one thing people do in everyday life, at work, at play, and in between. Tasks are the things people will tell you they do if you ask them and they are not applied linguists.¹

Longの定義の特徴は、実生活で行われている作業や行動をそのままtaskとして用いる点である。これによって英語の授業が意味の交渉 (negotiation of meaning) のあるコミュニケーション活動につながっていくのである。Longの定義するtaskでは学習者の興味や関心と指導要領を考慮した授業の内容をかね合わせていくという点で現在の日本の中学校の英語教育で実行するには難しい面がある。なぜなら日本の中学生は、学校の英語の授業で知識や技能を獲得しなければならない、なおかつ3年間で一定の文法知識を習得しなければならないのである。しかし、教室外の現実社会に目を向け、その「真正性」(authenticity) を活動に取り入れようとする考え方は大いに参考になると考える。

次にNunan (1989) は以下のように定義している。

In general, I too will consider the communicative task as a piece of classroom work which involves learners in comprehending, manipulating, producing or interacting in the target language while their attention is principally focused on meaning rather than form. The task should also have a sense of completeness, being able to stand alone as a communicative act in its own right. (Nunan p.10)²

この定義から、Nunanが実際の言語教育を強く意識していることがうかがえる。ただし、この定義では反復練習 (Pattern Practice) や機械的なドリル (Mechanical Drill) もtaskの定義に含まれるかのように読み取れる。英語を使うというだけでその活動をtaskとしてしまうと、taskはあまりにも広範囲に及ぶ活動になってしまう。

LongとNumanの定義を元に、二見 (2000) は次のような定義をしている。

前述したTask Based Language Teachingの提唱者のうち、real-world taskの立場をとるLongの定義では、Taskが教室外の現実社会に目を向け、その「真正性」(authenticity)を活動に取り入れようとする点は参考になるが、言語教育の現実とはあまりにもかけ離れていて、そのままでは日本の中学校の現状には合わず使いづらいという欠点があった。反対にpedagogical taskの立場をとるNumanのTaskは、言語教育の実情に合っているものの、かなり広範囲の活動がTaskに含まれ、Taskの位置付けを特定しにくいという欠点があった。

そこで、Task-based Programでは、Taskの定義をもう少し限定し、明確にしていきたい。すでに何度も述べたようにTask-based Programは、実践的コミュニケーション能力の育成を目標としたMFI「意味重視の指導」(Meaning-focused Instruction)である。従ってTask-based Programで扱われるTaskは、特定の文型や文法事項と関連に固執せず、学習者が持っている知識・技能をすべて使って現実に近いコミュニケーション活動を行うための課題である。(二見 p. 33)

二見はMFI「意味重視の指導」(Meaning-focused Instruction)を通した技能の使用(SKILL-USING)とFFI「言語形式重視」(Form-focused Instruction)を通した技能の習得(SKILL-GETTING)がスパイラルに展開されるように英語の授業をふたつの形態に分けることを提案している。この提案の中で英語の授業にMFIを積極的に取り入れて、コミュニケーションを目的に言語を実際に使用させることで真の実践的コミュニケーション能力の獲得を狙いとするTask-based Programを提唱している。

高橋 (2001) は、taskは必ず達成すべき明確な行動目標を持つコミュニケーション活動のひとつであるとし、コミュニケーションが成立するための一般条件を以下のように述べている。

- ①意味内容の伝達であること (message-focused)
 - ②聞き手と話し手の間に情報 (量) の差が存在すること (information gap)
 - ③対話者同士で自然にインタラクションが生じ、意味のやりとり (negotiation of meaning) が中心であること
 - ④そこで授受される情報が当事者にとって意味のあるものであること
- (高橋 p. 56)

加えてこれらの4つの条件には言語形式についての言及は一切ないとしている。教師がある目標構文を念頭において活動を組むことがあっても、学習者に対しては注文をつけることはしないことがこの定義の特徴である。

高島 (2000) は第二言語習得理論研究分野で注目を集めている「タスク」を、理論的基盤を変えることなしで日本の学習環境に合致するよう工夫を加えた「タスク活動」を提唱し、以下のように条件付けている。

- ①意味・伝達内容が中心であること (message-focused)
 - ②言語を用いて与えられた活動内容を達成することが第一義であること (completion)
 - ③意味のやりとりがあること (negotiation of meaning)
 - ④2つ以上の構造の比較があること (comparison of structure)
 - ⑤話し手と聞き手に情報 (量) の差があること (information gap)
 - ⑥活動や得られる情報が興味深いものであること (of interest)
- (高橋 p. 36)

これらの条件を満たし、「タスク活動」は学習者が主体的に言語形式を選択し、相手との自然なコミュニケーションを通して、与えられた課題を遂行する活動であるとされている。

高橋と高島の定義では、条件として重複する部分も多い。また、言語形式の選択が学習者に委ねられている点が特徴的と言える。

さらにWillis (1996) は言語選択の面で非常に特徴的な定義づけをしている。

タスク活動とは、情報意図の伝達を趣旨として、学習者の使用する表現に一切制限を加えることなく、自発的で即興的なやりとりを通じて所定の目標を達成させようとするものである。それは、習った構造や項目を「練習」す

るために英語を使ってみるという活動では決してない。³

これは、コミュニケーション中心の指導で文法や表現の仕方が身に付かないという問題点を克服しようとするものである。ただし、Willisは英語を第二言語として学習するESL (English as a Second Language) 環境におけるtaskを念頭においている。一方、日本は英語を母語としないEFL (English as a Foreign Language) 環境である。両者は、目標言語のインプット量に圧倒的な違いがあり、この環境の違いを無視してtaskのあり方を一律に論じることは出来ない。日本の学習環境はむしろ文法指導などの言語形式面を重視したものであるからだ。

さまざまな観点から定義づけされたtaskを本研究に即するよう、再定義したい。日本の英語教育環境にあって学習者のコミュニケーション能力を育成し、授業内での真のコミュニケーションを可能にするtaskの定義を目指した。

ここまで挙げてきたtaskの定義は以下のように集約される。

- ①意味の伝達が中心である (message-focused)
- ②意味の交渉がある (negotiation of meaning)
- ③学習者間に情報の差がある (information gap)
- ④学習者が使用する表現には一切の制限を加えない
- ⑤学習者が持っている知識や技能のすべてを使った活動である
- ⑥真正性を持つ (authenticity)

本研究では、現在中学校で使われている教科書を研究対象にしている。日本では、学習者が特別な努力をしない限り学校以外で英語を使う場面を作ることとはきわめて難しいと言える。これが指し示すのは日本の英語学習者は、例えば英語を母語とする国 (アメリカなど) で英語を学ぶのに比べて英語のinputが極端に少ないということである。

そこで④にあるように、Willisは学習者の使用する表現に一切の制限を加えないとしているが、inputの少ない日本の英語学習環境では活動が成立しなくなってしまう。なぜなら、学習者が日常生活の中で獲得する語彙や表現方法がほとんどなく、EFLの学習者は内在する言語知識が少ないからである。アメリカのようにESLとして英語を学ぶ環境と、日本のようにEFLとして英語を

学ぶのでは環境が違いすぎるのだ。Willisが提唱するtaskは主としてESLでの学習環境を対象に定義されている。例えば、アメリカに留学している学習者であれば他の学習者とは基本的に英語で会話をするだろう。ホームステイをしていればホストファミリーとも英語で会話をするだろう。テレビを見ても、ショッピングモールで買い物をして聞こえてくる言葉は英語だろう。このように生活が英語であふれている環境でのinputと日本で普通の中学生として生活している場合のinputでは、その量も質も差は歴然としている。前者の場合は必然的に使用可能な語彙は多く、「使って間違える」ことが出来る。しかし、後者の場合は「使う」ことすら出来ない。すなわちコミュニケーションが促進されなくなってしまうと同時に、①や②で挙げられているような意味の伝達や交渉が成立しない危険性があると考えられるのだ。

そこで、日本の中学校での英語学習における現状を踏まえて、筆者が定義するtaskには、④の条件と対極をなしてしまうのだが、活動にそのtaskで使うことの出来る表現や、例文、スキットが表示されている活動もその他の条件を満たしていればtaskとして定義することにした。

その理由は、例文やスキットをinputと捉え日本の英語学習環境に不足するinputをそれらで補っていると考えたという点がある。例文やスキットを元に学習者は自らの持っているすべての知識や技能を活用し、意味の伝達を行うことでその活動は真正性 (authenticity) を運び、真のコミュニケーションに近づいていくと私は考える。機械的なドリル (Mechanical Drill) や反復練習 (Pattern Practice) だけでは実践的コミュニケーション能力は育成されないが、多くのtask理論提唱者が語っているように文法事項の定着をないがしろにしてはコミュニケーション能力はやはり定着しないのだ。⑤に学習者の持っている知識や技能をすべて使うとしているが、日本の中学生が獲得できる知識や技能はそれこそ学校の英語の時間にしかそのチャンスがないというのが現状なのである。

したがって、本論文におけるtaskは学習者がコミュニケーション能力の育成のため、その授業での目標言語あるいはすでに獲得した知識や技能を意味の交渉 (negotiation of meaning) を行いながら使用するための活動であると定義する。さらにtaskは、学習者にとって真正性 (authenticity) のある題材を通して他の学習者と意味の伝達を行うことを重視する (message-focused) 活動である。

1. 2 taskの分類と、各カテゴリーによって養われる能力

本論文では、taskを授業内で獲得した知識や内在している知識を使ってコミュニケーション活動をするための活動であると定義したが、taskはその特徴によって次のように分類される。

1. 2. 1 taskの分類

白畑（1999）は task を以下のように分類した。

task 完了のための情報交換の方向性による分類

ア One-way Task（一方向的Task）

task完了のために参加者の間で情報の交換が義務付けられているtask。たとえば一人の学習者があるものを口頭で描写し、それを他の学習者が絵で描いて表現するというように情報の伝達が一方向的に行われるもの。

イ Two-way Task（双方向的Task）

taskを完了するために情報の交換が義務付けられているtask。taskの参加者がそれぞれ異なる情報を均等な割合で持ち、情報交換をしながら課題を解決することを目指す。Two-way TaskはOne-way Taskに比べ、相互交流（interaction）とそれに伴う意味交渉（negotiation of meaning）をより多く引き出すため、学習者の発話の機会が多くなる。

・taskの到達点による分類

ア Open-ended Task（開いたTask）

taskを完了するための到達点や解決方法が一つに限定されていないtask。

イ Closed Task（閉じたTask）

taskを完了するための到達点や解決方法が一つに限定されているtask。例えば、お互いの持つ情報を持ち寄りながら、特定の目的地を地図上で発見しなければならないtaskなど正しい到達点が一つに限定されているもの。Open-ended Taskに比べて、Closed Taskは到達点に達するためにより多くの情報交換を必要とする。

・task完了のための意見統一の必要性による分類

ア Divergent Task（拡散Task）

taskに参加する学習者の目標が共通でなく、taskの完了のために意見の統

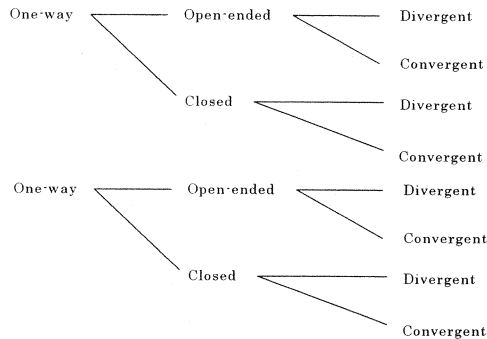
一が必要でないtask。ディベートなどの意見交換に見られるように学習者がそれぞれの自分の立場に立って発言する場合は意見を一つにまとめる必要がない。

イ Convergent Task (収束Task)

学習者が情報を交換して、意見などを一つにまとめなければ完了することの出来ないtask。意見の交換を求めないDivergent Taskに比べて、Convergent Taskでは関連表現が繰り返し使用されるため言語習得がより促進されると考えられている。

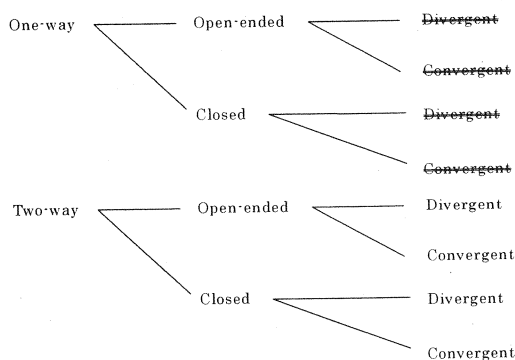
1. 2. 2 カテゴリー設定

「taskの分類」では、3つの観点でそれぞれ2つずつ分類した。それぞれをtaskの要素と考えて3つの観点から1つずつ組み合わせると、理論の上では全部で8つの組み合わせが出来る。

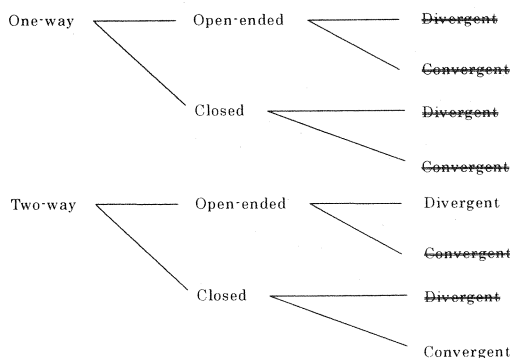


ここで、情報交換の方向性による分類 (One-way TaskとTwo-way Task) と意見統一の必要性による分類 (Divergent TaskとConvergent Task) の関係性について考えた。意見を統一すること、すなわちそこには情報の交換が義務付けられている。よって、One-way Taskには、Divergent TaskとConvergent Taskは存在し得ないことがわかった。

これで組み合わせはOne-way/ Open-ended Task・One-way/ Closed Task・Two-way/ Open-ended/ Divergent Task・Two-way/ Open-ended/ Convergent Task・Two-way/ Closed/ Divergent Task・Two-way/ Closed/ Convergent Taskの6つとなった。



次に到達点による分類（Open-ended TaskとClosed Task）と意見統一の必要性による分類（Divergent TaskとConvergent Task）の関係性について考えた。「到達点が1つでない」と「意見が収束する（統一される必要がある）」という2つの事象は背反する。同様に「到達点が1つである」と「意見が拡散する（統一される必要がない）」の2つの事象も背反する。よって、Open-ended（到達点が1つでない）に対応するのはDivergent（意見が拡散する）であり、Closed（到達点が1つである）に対応するのはConvergent（意見が収束する）であると言える。



このような経緯でtaskの組み合わせを理論上の8つから存在し得る4つ（One-way/Open-ended Task・One-way/Closed Task・Two-way/Open/Divergent Task・Two-way/Closed/Convergent Task）にまで厳選した。これら4つのTaskの組み合わせにすべてのTaskは分類されることになる。


1. 2. 3 各カテゴリーが養う能力

「taskの分類」を参考に、組み合わせ可能なものとして以下の4つに分類した。この4つの組み合わせを考察すると、以下のようにそれぞれが育成する能力に違いがあることがわかった。

①One-way/Open-ended Task

情報の伝達が一方的で、到達点が一つに限定されていないtask。例として、自己紹介、将来の夢の発表、夏休みの予定の発表などが挙げられる。このtaskでは、他の学習者との情報交換が義務付けられていないことと、明確な「正解」が設定されていないため、学習者自身の自己表現能力や発想力を養うことに重きが置かれている。また、このtaskでは、「発表しましょう」という形式をとるものが多く見られる。発表するという課題があることで、学習者本人が他の学習者に伝えたいことを考え、必要ならばその原稿を書き、話す力を向上させるだろう。このことから、このtaskでは、発信力が育成されると考えられる。

例) 自己紹介 (Sunshine1 p.41)

 今までに学んだ文を組み合わせて、「自己紹介」の文を作り、友だちの前で発表してみましょう。

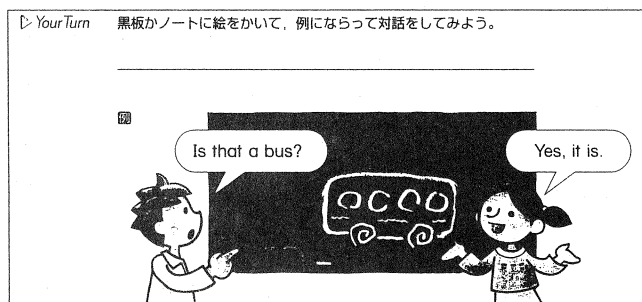
項 目	内 容
氏 名	
好きな動物	
できるスポーツ	
ひける楽器	
その他	

〈ヒント〉
 ←My name
 ←I like
 ←I play
 ←I

②One-way/Closed Task

情報の伝達が一方的で、到達点やtaskの解決方法が一つに限定されているtask。例として、お絵かきゲーム、クイズ、リスト作りなどが挙げられる。このtaskでは、例に挙げたように、ゲーム形式のものが多い。教科書の性質上、ある特定の文法事項を習得するために、スキットが用意されているため、このtaskは一見Patten Practiceのように見える。しかし、到達点を明確にしたゲーム形式をとることによって、学習者は同じ表現を繰り返し使用することになる。そのため、このtaskは学習者にとって表現の定着力のあるtaskであると言える。

例) お絵かきゲーム (New Horizon 2 p. 21)



③ Two-way/Open/Divergent Task

情報の伝達が双方向的で、到達点が一つに限定されていないtask。かつ、意見を統一する必要のないtask。例として、ロールプレイング、意見交換、フリートークが挙げられる。このtaskにはほとんどのものがスキットなどの例文を持たない。そのため、このtaskで行われる会話はあらかじめ準備しておくことの出来ない会話となる。学習者は、他の学習者が話したことを聞いて初めて自分の話す内容を考える。この一連の流れは実際のコミュニケーションにきわめて近い。学習者には会話を続けていくためのFluency（適切性）や即興性が養われていく。つまりこのtaskは、用意されていない会話に対応していく力、対応力が育成されるtaskである。

例) フリートーク (New Horizon 3 p. 33)

- チャットをしよう ベアで「行ったことがある場所」についておしゃべりをしてみよう。

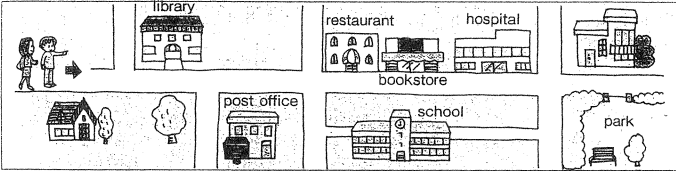
④ Two-way/Closed/Convergent Task

情報の伝達が双方向的で、到達点が一つに限定されているtask。かつ、意見を統一する必要があるtask。例として、道案内、買い物ゲーム、グループでの学校紹介文作りなどが挙げられる。このtaskでは、taskを完了するための到達点や解決方法が限定されているので、他の学習者との共同学習能力が養われ、同時に情報を交換する能力も向上する。このとき、学習者間ではとりとめの

ない会話ではなくその目的を目指した一貫性のある会話をする能力が養われる。また、taskの目的を達成するために他の学習者と交渉し、設定された課題や問題を解決する能力も育成される。そして、他の学習者と交渉する際に、相手が必要とする情報を伝えたり自分が必要とする情報を受け取ることで、他の学習者と力をあわせて学び合う協同学習能力も育成される。

例) 道案内 (Sunshine 2 p. 43)

QUESTION 地図を見て、次の質問に答えましょう。



1. 次の目的地をさがして、地図の上にするしをつけましょう。
Go straight ahead. It's between a restaurant and a hospital.

2. 地図を見ながら、例にならっていろいろな場所について友だちと対話しましょう。
(例) A: Excuse me. Where is the post office?
B: Turn right at the first corner. It's on your left.

これらの4つのカテゴリーにtaskを分類する中で、非常に分類に苦労したタイプの活動があったのでここで解説を加えておきたい。その活動とは“リストづくり”をする活動である。この“リストづくり”では「○○の例文を参考にして友達に質問し、表にその友達の名前と答えを書きなさい」という指示が出される。これだけを見ると、一見Two-way Taskであるように思われる。しかし、実際の活動を想像するとそこには情報交換が義務付けられていないのである。この活動はふたりの学習者が対話する形式で行われるのだが、情報を発信するのは答える側の学習者だけなのである。つまり質問をする学習者が表に名前や答えを書き込むという目的を達成するための活動なのでClosed Taskとされるのである。学習者には、質問の答えに対する返事をすることやそこから会話を広げていくことは求められておらず、やはり「情報の交換」は行われないのである。ゆえに“リストづくり”のtaskは”のOne-way/Closed Taskに分類した。





例) リストづくり (New Crown1 p.57)

PRACTICE PLUS ◆チャレンジしてみよう

自分の一日の生活について、下の表に時刻を書き入れよう。次に、例にならって、友だちに何時にそれをするかをたずね、その時刻を表に書き入れてみよう。

(例) A: I usually get up at six thirty. What time do you get up?

B: I get up at seven.

すること				
名 前	get up (起きる)	have breakfast (ブレイクファスト) (朝食をとる)	get home (帰宅する)	go to bed (ベッド) (寝る)
自分	6:30			
友だち	7:00			

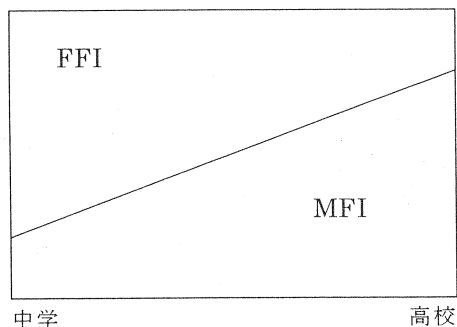
2 章 教科書の task 活動の分類

この章では、日本のほとんどの中学校で使われている教科書にどれだけのtaskを取り入れているのかを調べることで現在の英語の授業が、どのくらいコミュニケーション能力の育成を目指しているかを調査したいと考える。また、taskを4つのカテゴリーに分類することで各教科書においてどのような能力の育成に力を入れているのか、育成される能力に偏りはないか、学習者の年齢に応じたtaskの振り分けがなされているのかなどを考察する。さらに3種類の教科書のtaskを合計することで現在の日本の英語教育の実状を探りたいと考える。

2. 1 仮説の設定

白畑のtask分類を元に設定した4つのカテゴリーに現行の教科書のexerciseからtaskを分類し、それを考察するにあたって以下の仮説を立てた。この仮説は次の大下 (1996) の研究を参考にした。大下は、MFIとFFIのバランスは学習者の発達段階によって変化すべきであると考え、下の図のモデルを提示する。初期ではFFIを重視し、段階が上昇するにつれてMFI重視に移行すべきで

あるという考えである。



仮説Ⅰ exerciseの中にtaskが占める割合は3割前後であろう。

なぜならば、大下によると学習初期段階では「言語形式の学習」と「意味を重視した学習」の割合がおよそ2：1で行われることが好ましいとされているからである。つまり、taskは「意味を重視した学習」に当たるので全体の3分の1程度になると考えられる。

仮説Ⅱ 4つのカテゴリーのうち、①や②のOne-way Taskが多くなるであろう。また、学年が上がるにつれて①や②のOne-way Taskが減り、③や④のTwo-way Taskが増えるであろう。

なぜならば、One-way Taskは他の学習者との情報交換が義務付けられておらずコミュニケーションの前段階的活動であると言えるからだ。①ではコミュニケーションの第一歩としての自己表現や情報発信を念頭に置いており、②は文法事項の定着がなされる。英語学習が中学・高校・大学と行われるとして中学はその初期にあたり、taskの中でもコミュニケーション活動として比較的難易度の低いOne-way Taskに多くの時間が費やされると考える。そして、その中学校でも3年生時は実際のコミュニケーションにより近いTwo-way Taskの配分が1年生時に比べると多くなると考えられる。すなわち1年生時と3年生時でOne-way TaskとTwo-way Taskの配分が逆転するというものではなく、3年生時でもOne-way TaskはTwo-way Taskよりも多いがTwo-way Taskの数は1年生時よりも増えると考ええる。

仮説Ⅲ 研究対象にした3つの教科書ごとに大きな違いはないであろう。

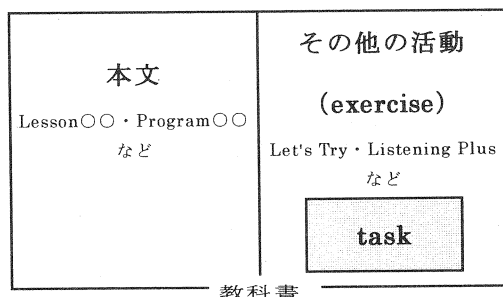
なぜならば、教科書ごとに違いがあったならば育成される能力に差があることになる。たとえば③や④などのTwo-way Taskが極端に多かったならば、中学生期は英語学習の初期段階であることを無視した教科書であることになるからだ。学習者は教科書を選択できないという点からも、検定教科書はこの点に配慮するべきであると考ええる。

2. 2 分類対象

現行の検定教科書 (*Sunshine, New Horizon, New Crown*) 3 学年 9 冊

2. 3 分類方法

本研究を行うために教科書の内容を、「本文」と「その他の活動」(exercise)に大きく分類した。「本文」とはLesson○○や、Program○○のように表される部分のことで、主に英文を本文として内容が進んで行く。英語の授業の中でメインの教材として使用されるパートである。「その他の活動」(exercise)とは本文以外の部分のことを指し、本文の内容とは別にリスニングやライティングなどの活動を行うパートである。また、本文で学習した文法事項の反復練習 (Pattern Practice) や機械的なドリル (Mechanical Drill) もこのパートに含まれる。本研究においてtaskとは「その他の活動」(exercise)の中で、1. 1で定義したtaskに当てはまる活動を示す。



今回はこのexerciseを分析対象にした。その中にあるtaskを次の4つのカテゴリーに分類し、これらの基準に当てはまるものを抽出し、カテゴリーごとに分類した。

2. 4 分類結果

分類結果を表にすると以下ようになる。

表 1：検定教科書ごとのtaskの分類とexerciseにおけるtaskの割合

	Sunshine				New Horizon				New Crown				total
	1	2	3	sub total	1	2	3	sub total	1	2	3	sub total	
①	2	4	5	11	5	6	8	19	7	10	4	21	51
②	5	4	4	13	5	3	0	8	2	3	2	7	28
③	0	2	1	3	2	4	4	10	1	2	1	4	17
④	4	2	0	6	2	0	1	3	0	1	1	2	11
task	11	12	10	33	14	13	13	40	10	16	8	34	107
exercise	71	82	69	222	104	100	100	304	74	75	65	214	740
task/ exercise	15.5%	14.6%	14.5%	14.9%	13.5%	13.0%	13.0%	13.2%	13.5%	21.3%	12.3%	15.9%	14.5%

- ・検定教科書名の下での[1]から[3]までの数字は学年を示す。
- ・[subtotal]は3学年通しての小計を示す。
- ・[total]は3種類の教科書すべての総合計を示す。
- ・表中でパーセント表示されていない数字はそれぞれの個数である。
- ・[①]はOne-way/Open-ended Task、[②]はOne-way/Closed Task、[③]はTwo-way/Open/Divergent Task、[④]はTwo-way/Closed/Convergent Task である。

表 2： taskにおけるOne-way TaskとTwo-way Taskの割合

	Sunshine				New Horizon				New Crown				total
	1	2	3	sub total	1	2	3	sub total	1	2	3	sub total	
One-way Task	7	8	9	24	10	9	8	27	9	13	6	28	79
Two-way Task	4	4	1	9	4	4	5	13	1	3	2	6	28
task	11	12	10	33	14	13	13	40	10	16	8	34	107
One-way Task/task	63.6%	66.7%	90.0%	72.7%	71.4%	69.2%	61.5%	67.5%	90.0%	81.3%	75.0%	82.4%	73.8%
Two-way Task/task	36.4%	33.3%	10.0%	27.3%	28.6%	30.8%	38.5%	32.5%	10.0%	18.8%	25.0%	17.6%	26.2%

- ・ 検定教科書名の下での[①]から[③]までの数字は学年を示す。
- ・ [subtotal]は 3 学年通しての小計を示す。
- ・ [total]は 3 種類の教科書すべての総合計を示す。
- ・ 表中でパーセント表示されていない数字はそれぞれの個数である。
- ・ [One-way Task]は[①]と[②]の合計である。同様に[Two-way Task]は[③]と[④]の合計である。
- ・ [One-way Task/task]は[task]に占める[One-way Task]の割合を示す。同様に[Two-way Task/task]は[task]に占める[Two-way Task]の割合を示す。
- ・ [task/exercise]は[exercise]に占める[task]の割合を示し、小数点第二位を四捨五入した数値である。

2. 5 分類表の考察

現在中学校で使われている教科書 3 種類の本課以外の活動からtask活動をピックアップして分類表にまとめ、その結果から 2. 1 で立てた仮説をもとに以下のような考察をした。

仮説 I exerciseの中にtaskが占める割合は 3 割前後であろう。

分類表のexerciseにおけるtaskの割合は、3 種類の教科書合計では14.5%という結果が得られた。また、教科書別ではSunshineが14.9%、New Horizonが13.2%、New Crownが15.9%であった。多少の差異は認められるものの、どの教科書も14.5%という全体の合計での割合に前後する形となった。全体の合計でも教科書別でもexerciseの中に占めるtaskの比率はおよそ14%で、これは少ないと言える。なぜならば、Task Based Language Teachingは英語を使用することで英語の習得を目指す指導法であり、taskは学習者が習得した知識や技能を使用する唯一の機会だと言えるからだ。exerciseはリスニングの活動を除くと、そのほとんどが反復練習 (Pattern Practice) であった。何度も言うように、反復練習 (Pattern Practice) は不要なものではない。学習者は、英語を習得するために語彙や文法事項などの知識をinputしなければならない。その方法として反復練習 (Pattern Practice) や機械的なドリル (Mechanical Drill) があり、それを逐一行っていくことは間違いなく必要なことである。しかし、英語 (のコミュニケーション能力) を習得するためには、inputした知識をoutputすることも大切になってくる。学校の教科書は、その課

(Program〇〇やLesson〇〇) で学習する文法事項が決まっています、本文はそれまで学習した文法事項と新しく学習する文法事項を織り交ぜて構成されている。そのため学習者は本課が進むごとに新しい知識をinputすることが出来る。しかし、そのつどoutput出来ないため、それぞれの知識をコミュニケーションの場で使用したことにはなっていない。教科書がひとつの文法事項を学習することに進んでいくものである限り、その都度学習者がtask活動を行って、獲得した知識を使用していくことが理想的な形だと言える。したがって14.5%というexerciseの中に占めるtaskの比率は「言語形式の学習」2に対し「意味を重視した学習」1の比率に達しておらず、コミュニケーション活動よりも反復練習 (Pattern Practice) や機械的なドリル (Mechanical Drill) による文法事項の学習に偏ってしまっていることがコミュニケーション能力を育成させることが十分に出来ないと言えるのである。

仮説Ⅱ 4つのカテゴリーのうち、①や②のOne-Way Taskが多くなるであろう。また、学年が上がるにつれて①や②のOne-Way Taskが減り、③や④のOne-Way Taskが増えるであろう。

taskを分類した結果、① (One-way/Open-ended Task) がもっとも多いことがわかった。①のtaskは自分の持っている情報を他者に発信するタイプのtaskである。コミュニケーションの第一段階として、自己表現をするという行為は理に適っていると言える。また、本研究で①のtaskとして捉えたものの内容を吟味すると、多くの活動が学習者にとって身近であるという点に重点が置かれているように感じた。①のtaskでは自己紹介や将来の夢についてといったことをテーマとしており、学習者が日本語で取り組んだことがあるような事柄、たとえばクラブ紹介など、を英語で取り組むケースが多く見受けられた。他にも、趣味や好きなスポーツ選手についてなどがテーマとなっている活動が多かった。これらは実際のコミュニケーションで「話題」となるであろうと考えられるテーマである。このことが示すのは、①のtaskは、実際に会話をする (コミュニケーションをとる) 前段階であるということである。実際のコミュニケーションで「話題」とされることについて、まずは自分が発信するときの練習として①のtaskは効果的であると言える。ただし、①のtaskが最も多いということは、学習者間での情報交換が少ないということも示している。というのも、One-way Taskは情報交換が義務付けられていないため

である。また、Open-ended TaskはClosed Taskと比べて意味の交渉 (negotiation of meaning) や発話が促進されにくいという欠点もある。①のtaskが最も多いということは、自分の持っている情報を発信する力は育成されるが他者とコミュニケーションをとっていく力を育成することが目指されていないことになる。

次に多かったのが② (One-way/Closed Task) である。②のtaskはある文法事項の定着を目指したtaskであると言える。また、①のtaskと同様にOne-way Taskである点から実際のコミュニケーションの前段階的な要素を多分に含んでいる。というのも情報を発信するのは自分だけであり、実際のコミュニケーションでは相手からの応答がないというケースは減多にないからだ。②のtaskが多いということが示しているのは、文法事項の定着に重きが置かれているということである。Closed Taskはゲームの形式をとっている活動が多い。そのため、同じ文法事項を繰り返し使用することになる。学習者は文法事項の反復練習 (Pattern Practice) をゲームの中でこなしているのだ。教師のあとに続けて練習する形式の反復練習 (Pattern Practice) よりも、ゲームとして楽しめる②のtaskのほうが学習者にとっての心理的な負担は軽くて済むであろう。ただし、前述したようにこれはあくまで反復練習 (Pattern Practice) であり、実際のコミュニケーションの前段階であることは見逃してはならない。

分類表よりtask全体に占めるOne-way Taskの割合および Two-way Task の割合は①と②、すなわちOne-way Taskの数 (全体では73.8%、*Sunshine* では72.7%、*New Horizon* では67.5%、*New Crown* では82.3%) がTwo-way Taskの数 (全体では26.1%、*Sunshine* では27.2%、*New Horizon* では32.5%、*New Crown* では17.6%) を圧倒的に上回ったことがわかる。One-way TaskはTwo-way Taskと比べると、情報交換が義務付けられていないので他の学習者と協同で課題に取り組んだりする活動で行われる、学習者同士の相互交流 (interaction) が少ないという欠点がある。今回の研究で得た分類表のデータを見ると、英語の授業では学習者同士が対話形式でコミュニケーションをとる機会が非常に少ない (Two-way Taskの数が全体では26.1%、*Sunshine* では27.2%、*New Horizon* では32.5%、*New Crown* では17.6%である) という事実が明らかになった。英語のスキルに関してほぼ同等のレベルの学習者が20人から30人同じ空間 (教室) に集まって共に学習することが出来るという、ある意味では非常に特殊と言える学習環境が学校という場所だと考えられる。そのような環境

では条件次第で活発なコミュニケーション活動が行われて然るものだが、現状では学習者にはこのチャンスが十分に活かされていないと言える。

それぞれの教科書が3年間を通してOne-way Taskを中心に活動を展開しているが、1年生から3年生に上がるにつれてTwo-way Taskが増える傾向にはないことがわかった。*Sunshine*はむしろ減少傾向にあり、*New Horizon*と*New Crown*も3年間ほとんど同数であった。少なくとも意図的に増加させる傾向は見られないと言える。このことから、現行の教科書は学習が進むにつれてコミュニケーション活動を取り入れていくという意図を持っていないと考えられる。

仮説Ⅲ 研究対象にした3つの教科書ごとに大きな違いはないであろう。

調査の結果、それぞれに大きな違いは認められなかった。しかし、すべての教科書が共通の傾向を持っているとは言えない。3種類の教科書すべてに共通する点は、exerciseに占めるtaskの割合である。どの教科書でも14%前後という数値が出ている。この数値は決して多いとは言えない。task 活動が来ていないことは学習者が英語を使用できていないことを示すので、コミュニケーション能力を育成するための英語の授業が行われていないと言える。また本研究の結果、3種類ともそれぞれ微妙な差異を持っていることから、異なった傾向を持っていることも明らかになった。育成する能力もそれぞれ異なり、優れた部分がある一方で改善すべき側面もあった。

Sunshine の分類表を見ると、多い順に②、①、④、③となっていることがわかる。これは、全体の合計で得た①、②、③、④の順序と大きく異なっている。*Sunshine*では、One-way Taskの中ではOpen-ended TaskよりもClosed Taskを、Two-way Taskの中でもOpen-ended TaskよりもClosed Taskを多く取り入れている。②と④のtaskが他のふたつの教科書の②と④のカテゴリーと比べて最も多くなっている。そのことから *Sunshine* はゲーム性を重視しているということが言える。特に②は学習者に文法事項を定着させる性質を持っている。よって、*Sunshine* では文法事項の定着が念頭に置かれていることがわかる。④が他のふたつの教科書の④のカテゴリーと比べて最も多いので、*Sunshine* は他の教科書よりも協同学習能力や問題解決能力を育成する教科書であると言うことも出来る。ただし、1年生のときに③が、3年生のときに④がひとつもない。すべてのカテゴリーの task が同数であるべきだとは考えな

いが、1年間の授業の中でひとつもないとなると総合的にコミュニケーション能力を向上させるにはバランスが悪いと言わざるを得ないであろう。

New Horizon は3種類の教科書の中で、taskの数が最も多い。しかし、exerciseの数も最も多いので割合は低い。それぞれのカテゴリーに分類されたtaskの数が多い順に並べると①、③、②、④となる。これは *Sunshine* と反する結果となった。つまり、One-way TaskでもTwo-way TaskでもOpen-ended TaskがClosed Taskよりも多く取り入れられている。特に③は他のふたつの教科書の③のカテゴリーと比べると最も多い。このことから*New Horizon* は他の教科書よりも対応力を育成する教科書であると言える。すべてのカテゴリーの中で③は最も実際のコミュニケーションに近い活動である。例えば、「○○についておしゃべりをしましょう」という活動が③に含まれる。この種類の活動はやはり*New Horizon* に多かった。これはまさにフリートークであり、実際のコミュニケーションそのものである。Task Based Learning の最終的な到達点はまさに実際のコミュニケーションであり、この③は難易度としては最も難しい活動である。教師によるコントロールはなく、学習者が自分で会話を続けていかなくてはならない。この活動では、教室外での会話などで最も役立つ対応力が養われる。こういった点で*New Horizon* は優れた教科書だと言える。しかしOpen-ended Taskの割合が高く、Closed Taskの割合が低い。②が少ないことで、文法事項の定着が出来づらいと考えられる。フリートークをするというtaskでは学習者が内在している知識や技能なしでは発話が促進されない。*New Horizon* の3年生の教科書には②がひとつもない。2年生時には②がひとつもない。*New Horizon* も*Sunshine*と同様にゼロの項目があるのでバランスが良いとは言えないであろう。

New Crown は、それぞれのカテゴリーに分類されたtaskの多い順に並べると①、②、③、④となり、全体の合計と同じ順序になった。*New Crown* では①のtaskが他のふたつの教科書の①のカテゴリーの中で最も多かった。よって、自己表現力や情報発信力を育成することに主眼を置いている教科書であると言える。しかし、それに比べて他の3つの種類のtaskが極端に少なくなっている点は問題点である。特に③と④のtaskはあまりにも少ないのではないだろうか。Two-way Taskが少ないということは、学習者間での相互交流(interaction)が行われにくいことを示す。さらに*New Crown* の特徴としてもう1点挙げたい。それは学年ごとにtaskの数を見たときに、多い方から①、②、③、④の順になっている。3年間の合計もこの順番であり、他の教

科書には見られないことである。このことから*New Crown*は一貫して①のtaskに重点を置いていることがわかる。One-way Taskは実際のコミュニケーションの前段階的活動であると言えるので、*New Crown*では、中学生期はコミュニケーション能力育成の土台作りをする期間と捉えていると考えられる。とは言うものの、学校という特殊な空間で英語を学習しているにもかかわらず、他の学習者と協同で学習する機会を減らしすぎてしまうのはややもったいないと考える。④のtaskは他の学習者と情報を交換しひとつの到達点に向かう活動なので、最も発話が促進される。自己の表現だけでなく、他者から情報を得ることも「土台づくり」の期間に行っても良いのではないだろうか。また、他のふたつの教科書と異なり学年ごとのtaskの数にばらつきがある。特に3年生では8つとなっており、コミュニケーション活動が少ないと言える。つまり授業がコミュニケーション能力の育成よりも文法事項の定着を重要視していることがうかがえる。

3 章 改善への模索


現行の教科書に設定されているtaskを調査した結果、現在の英語教育における問題点がみつかった。それは学校という空間を活かせるであろうTwo-way Taskの割合が少なく、コミュニケーション能力の育成が不十分であるという点である。調査のために設定した4つのカテゴリーのうち、Two-way Taskである④（Two-way/Open/Divergent Task）は実際のコミュニケーションに近く、学習者にとって準備されていない会話を継続するための対応力を養う。同じくTwo-way taskである④（Two-way/Closed/Convergent Task）は協同で学習する他の学習者と同じ到達点を目指してコミュニケーション活動することで4つのカテゴリーの中で最も学習者の発話を促進する。発話の促進は本来のtaskの目的である「英語をコミュニケーション的な意味での使用すること」を達成し、学習者は英語を使用することで本当の意味での英語の定着がなされる。そこでこの章では、調査に使用した教科書のtaskでOne-way Taskに分類されたものをTwo-way Taskに改良することで教科書のOne-way TaskとTwo-way Taskの比率を改善したいと考える。

3. 1 ②（One-way/Closed Task）から④（Two-way/Closed/Convergent Task）への改良

②のtask (New Crown 2 p. 46)

例にならって、将来どんな職業につきたいかを友だちに聞いて、その結果を下の表に書いてみよう。②

(例) 自 分: What do you want to be in the future?
 友だち: Well, I want to be a teacher.
 自 分: I see.



友だちの名前	(例) 友だち			
将来の夢	teacher(教師)			

上に挙げたtaskは②に分類されるtaskである。このtaskでは目標の文法事項（このtaskでは不定詞の want to ～）を使ってリストづくりのゲームを行うことでその文法事項を定着が効果的に行われる。このtaskをよりコミュニケーション的な活動にし、学習者の発話を促進させるために下のような④の要素を持つtaskに改良した。

改良したtask

下の中から自分が就きたい職業に一番近いものを選ぼう！そのあと、例に倣って、将来どんな仕事に就きたいか友達に聞いて、自分と同じ職業に就きたい人をみつけよう！また、自分と違う職業に就きたい友達も下の表にメモしておいて、探している人がいたら教えてあげよう！

[サラリーマン=a businessman/woman エンジニア=an engineer 大工=a carpenter 美容師=a hairdresser 小説家=a novelist 写真家=a photographer]

[Example 1]

You: What do you want to be in the future?

Friend: Well, I want to be a teacher. How about you?

You: Oh!! Really? Me too. So, we can make a Teacher Group!

[Example 2]

You: What do you want to be in the future?
Friend: Well, I want to be a teacher. How about you?
You: I want to be an engineer.
Friend: Kazuki said he wants to be an engineer.
You: Thank you very much.
Mari wants to be a teacher. Ask her, and you can make a group with her.

友達の名前						
将来の夢						

元のtaskではリストづくりをしてから「発表する」形式をとっていたが、同じ職業につきたい人を探してグループを作るtaskに変えることで、情報の交換が義務付けられる。また、「他の学習者が探している人を知っていたら教えてあげる」という作業を加えることで、 want to ～ の構文だけでなく、学習者がすでに獲得した知識を使用できるようにした。このtaskは制限時間を設定するか、○人見つけたら勝ちとすることで明確な到達点が設定され、ゲーム形式のコミュニケーション活動となる。そのため学習者がゲームに勝ちたいと思う工夫が必要である。例えば、挙手や発言の数をポイントに置き換えたシステムをあらかじめ授業に設定しておき、ゲームに勝つとポイントがもらえるようにしておくのである。このような工夫をすることで学習者のゲームに対する動機付けが行われ、ゲームが活発になることで学習者の言語使用も豊かになる。

3. 2 ① (One-way/Open-ended Task) から③ (Two-way/Open/Divergent Task) への改良

元のtask (New Horizon 3 p. 59)

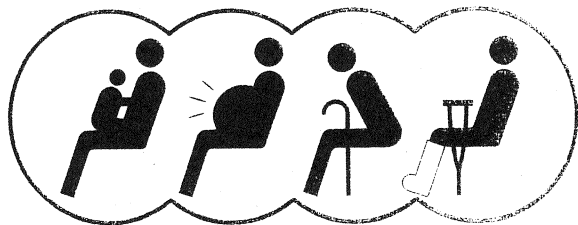
Step 1

● 賛成か反対かを聞こう

由美たちのクラスで、優先席 (priority seat) について英語で議論しています。
それを聞いて、次の2人の立場を選ぼう。

● 「若者は優先席にすわるべきではない」という意見に対して…

由美	<input type="checkbox"/> 賛成	<input type="checkbox"/> 反対
健	<input type="checkbox"/> 賛成	<input type="checkbox"/> 反対



Step 2

● 賛成・反対の理由を聞こう

もう一度聞いて、それぞれの賛成・反対の理由を ㉠～㉢ から選ぼう。

由美

健

- ㉠——優先席はそれを必要とする人のためのものだから
- ㉡——優先席でなくても若い人は席をゆずるべきだから
- ㉢——すわっても、近くにゆずるべき人がいれば席をゆずるから

Option

● 自分の主張をしよう

この議論に参加して、

“Young people should not sit in priority seats.”

という意見について、あなたの考えを言ってみよう。

上に挙げた活動は、議論の様子をモチーフにしたリスニングの活動である。CDを聞いて活動するStep1やStep2を経て、Optionの「あなたの意見を言ってみよう」という活動が①に分類される。このtaskでは特定の文法事項ではなく議論をするときの意見の言い方などを学習することが目標として設定されている。しかし①のtaskであるため、他の学習者との情報の交換が義務付けられておらず、相互交流 (interaction) が行われない。そこで、このtaskを次のように改良した。

改良したtask

“Young people should not sit in priority seats.”をテーマにしてクラスでディベートをしよう。下の「使える表現」を参考にして自分の意見を主張しよう!

☆使える表現☆

・賛成する

I agree with ... Exactly! You got a point.
That's true.

・反対する

I disagree with ...
I don't think ...

・やわらかく反対する

I see what you mean, but ...
I see your point, but ...

このように、実際にディベートを行うことで元のtaskで目標としていた「意見の主張の仕方」を学習することが出来るだけでなく、他の学習者の意見を聞きそれにさらに返答するという活動も行うことが出来るようになる。ディベートは情報交換が義務付けられており、最終的に意見を収束させる必要がないので、典型的な③のtaskであると言える。学習者がディベートを行うための準備をする時間や期間を与えて、本来のディベートになるべく近くすることが出来ればさらに学習効果が高まる。ディベートでは自分の意見を主張することと他者の意見を聞くことの両方が学習者に求められ、相手の意見を聞いて返答するという行為は日常の会話でも行われていることである。また、教師は準備段階でアドバイスをするがディベートには介入せずに、議論を進行する役も学習者に任せると、学習者が使用する英語はより広範囲に及ぶのでさらに効果的な活動となる。

以上、taskの改良を行って気づいた点がある。今回の改良は①から③への改

良と②から④への改良であり、いずれもOne-way TaskからTwo-way Taskへの改良であった。この改良では、①と②のOne-way Taskに「情報交換」の要素を加えただけである。つまり、One-way Taskに「情報交換」の要素を加えるだけでTwo-way Taskに改良できることがわかった。この方法は元のtaskの目的やねらいを保持したまま、それらをコミュニケーション活動へと改良できる。このように、検定教科書のtaskに少しの工夫を加えるだけで、よりコミュニケーション活動を行うことができる。そして、一部のOne-way TaskをTwo-way Taskに改良することで全体のOne-way Taskの比率を下げ、Two-way Taskの比率を上昇させることが出来る。

結論

今日の英語教育は実践的コミュニケーション能力の育成を目指しているものの、検定教科書に見るtaskはOne-way Taskの比率がTwo-way Taskの比率を大幅に上回っていた。このことから英語の授業のマテリアルとなる教科書の活動がコミュニケーション能力の育成には不十分であることがわかった。ただし、One-way TaskがTwo-way Taskよりも劣った活動であるのではない。One-way Task (①と②) で養われる能力はTwo-way Task (③と④) の活動を行う上で確実に必要になる能力である。現行の検定教科書ではOne-way Taskによって養われた能力を活かす場であるTwo-way Taskの活動が少なすぎるため、効果的にコミュニケーション能力の育成をするに至っていないのが現状である。

そのため授業内でコミュニケーション能力を育成するためには、特にTwo-way Taskを取り入れていく必要がある。現行の検定教科書にTwo-way Taskが少ないのなら、教師がtaskを考案し授業でtaskを行っていくことになる。教科書の活動には、数は少ないながらもtaskと呼べる活動が設定されている。その中のOne-way Taskを少し工夫することでTwo-way Taskへと改良することが出来る。教師のちょっとした工夫で、英語の授業は飛躍的にコミュニケーション授業へと変化する。taskを取り入れた授業が学習者のコミュニケーションな発話を促進し、生徒が授業に、より「楽しさ」を感じられることを筆者は経験している。

task活動に基づく学習が文法事項の学習を無視した活動ではなく、文法事項が定着をした上でのコミュニケーション活動であり、学校教育の現実に適っ

た学習法であることが理解されて広く取り入れられていけば、日本の英語教育は指導要領が掲げる、「実践的コミュニケーション能力の育成」の目標の達成に一步近づくことが出来るであろう。

注

- 1 M. H. Long. *A Role for Instruction in Second Language Acquisition*
引用文は二見（2000）からの引用である。
- 2 D. Nunan. 1989. *Designing Tasks for the Communicative Classroom* (C.U.P.)
引用文は二見（2000）からの抜粋である。
- 3 引用文はJane Willis. 1996. *A Framework for Task Based Learning* (Longman)
の翻訳である、ジェーン・ウィリス 青木昭六・豊住誠訳 2003 『タスクが開く新しい英語教育——英語教師のための実践ハンドブック——』（開隆堂出版）より抜粋した。

参考文献目録

- ウィリス, (青木昭六・豊住誠訳). 2003. 『タスクが開く新しい英語教育—英語教師のための実践ハンドブック—』 開隆堂出版
- 大下邦幸. 1996. 『コミュニケーション能力を高める英語教育—理論と実践』 東京書籍
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則共著. 『英語教育用語辞典』 大修館書店
- 高島英幸. 2000. 『実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導』 大修館書店
- 高橋正夫. 2001. 『実践的コミュニケーションの指導』 大修館書店

二見隆久, 2000. 「コミュニケーション能力の育成を目指した指導法の研究—
Task-based ProgramとText-based Programを通して—」
埼玉県長期研修教員研究報告書

New Crown English Series 1,2,3. 三省堂 (2001年検定済み)

New Horizon English Course 1,2,3. 東京書籍 (2001年検定済み)

Sunshine English Course 1,2,3. 開隆堂出版 (2001年検定済み)

謝 辞

本論文を執筆するにあたって、大妻女子大学助教授で立教大学の兼任講師でいらっしゃる伊東武彦先生に直接の指導をしていただきました。伊東先生には3年生の時に授業でお世話になっただけの縁で、この卒業論文に熱心な指導をして下さりました。毎週のようにお時間を作っていただき、ある時は本部校である大妻女子大学のご自身の研究室に招いていただき、熱心に指導してくださいました。的確な参考文献も提供していただき、伊東先生のご指導なくしてはこの論文は日の目を見ることはなかったと言っても過言ではありません。今思えばご自身の学生さんたちの卒業論文の指導でお忙しかったにもかかわらず、大変なご迷惑をおかけしてしまったと反省しております。私が教育実習に行く前に、伊東先生が担当された授業である「英語科教育法」で学んだことが教育実習でも卒業論文執筆においても大きな支えになりました。英語科教育法でも教育実習でもキーワードになっていた「コミュニケーション能力の育成」が今までもこれからも私の人生のキーワードになると思います。私が教員になるまでに行わなければならないことが「コミュニケーション能力の育成」であり、教員になってから取り組みたいことも「コミュニケーション能力の育成」を目指した授業であります。今回学んだことを土台にして、今後も研究を重ねていく所存です。末筆ではありますが、この場をお借りして伊東先生に心より御礼申し上げます。

Classifying Tasks in Official Textbooks in Terms of the Activities' Characteristics

Hiroki Morioka

Despite having studied English at least for three years, many people say, "I can't speak English." How strange this situation is. Since my dream is to be an English teacher, I have to deal with what is wrong with English education in Japan. When I was a third year student in university, I started to learn how to teach English. Then I had a new idea: English is thought to be one of the subjects that we MUST study, such as mathematics, science and history. However, it is not that kind of subject but a way to communicate with people.

In chapter 1, I defined what the "Task" is. It is an important element for a new teaching method that aims to improve students' communicative competence. Tasks are defined as activities in which students can use their English and communicate with other students. However, it does not mean that the new method is only focused on communication. The Tasks are definitely based on knowledge of English grammar. Considering the characteristics of the Tasks, I found that they are categorized into four groups. Each group has specialties in terms of English communication. One is good for expressing yourself, another is very close to real communication, and so forth.

In chapter 2, I looked through official textbooks for junior high schools to choose

Tasks. After that, I organized the Tasks into the four groups that I set up in chapter 1. Hypotheses are suggested to make the issues clear. This classification indicated that there is a severe shortage of Two-way Tasks, in spite of the fact that there are so many One-way Tasks.

In chapter 3, referring to the result of the classification in chapter 2, I gave some ideas on how to change One-way Tasks into Two-way Tasks.

In conclusion, I believe that a new type of English teaching method, such as Task Based Language Teaching, will help students improve their English skills more efficiently. It is simply because Tasks are so much fun to do that students will be interested in the English language itself and become motivated to use English in their daily life.